

災害支援アンケート 集計結果

令和4年9月1日

ふくしま地域活動団体サポートセンター

アンケート実施の目的

「東日本大震災」や「台風19号」、今年3月16日に発生した福島県沖地震、国内各地で発生している豪雨など、いつ起こるか予測がつかない災害に対して、県内外で災害時に活動されている団体から経験を通して感じたことや今後の支援で必要なことをお伺いすることで、未来に発生する災害から身を守る術や、サポートの際に必要な情報を学ぶことを目的とする。

回答者

認定特定非営利活動法人茨城NPOセンターコモンズ
代表理事 横田 能洋 氏



Q1. 関東・東北豪雨（常総水害）の際の
主な被害状況を教えてください。

人的被害は死亡2名、重傷3名、中等傷21名
（その後の災害関連死含まず）住宅被害全壊
53、大規模半壊1575、半壊3475、ヘリによる
救助1339人。鬼怒川堤防決壊による浸水が広
範囲且つ長期間におよび半壊であっても住宅再
建に多額に費用が必要になったが、被災世帯が
多かったため義援金の配分が薄く、住宅再建を
あきらめる人が多かった。常総に住む日本人が
1割人口減少した。

Q2. 災害時の支援の特徴や大切
に感じたことを教えてください。

災害ボランティアセンターでは、いかに多くの
ボランティアに来てもらい泥だしニーズに
対応するかに集中してしまう。それ以外の被災
者の悩みを受け止め、専門性を持った団体
につなぐ役割があったほうがよいと感じた。
緊急、復旧期には外部支援があるが、3か月
程してボラセンがしまると、外部支援が急に
なくなる。その後の復興を支える担い手が必
要だと感じる。



**Q3. 災害支援を行って、こんなことをした方が
良いなどのNPOや災害支援団体へ向けた
アドバイスがあれば教えてください。**

市外から、炊き出し、マッサージ、精神的ケアなど多様なボランティアの申し出があった際に行政だけではつなぎきれない部分がある。民間の中間支援がそのコーディネートをするとう被災地が他地域とつながることになる。家をはなれバラバラになった被災者が互いの動向を知り自分はどこでどう生活再建するかを考えられる機会をつくるのが大切。炊き出しは、大きな避難所ばかりでなく、住宅被災が多く住民がバラバラになっている地区で行い、食料支援だけでなく被災者の再会と情報交換の場として行うほうがいい。

**Q4. 水害が起きてから地域の災害支援体制で
変わったことがあれば教えてください。**

常総市では日頃の備えがなく逃げ遅れが大きな反省点になった。行政だけでは避難先は準備されないことがわかったので、二つの町で自主防災組織をつくり、避難所で使う機材をそろえ学校と協力して避難所運営訓練を行うようになった。水害後、外国籍住民の割合が増えたこともあり、そうした人も参加する多文化防災に力をいれている。



回答者

認定特定非営利活動法人日本NPOセンター 事務局長 吉田 建治 氏



Q1. 災害時にされている主なことを教えてください。

地元NPO支援センターの災害支援活動があれば、その後方支援を必要に応じて実施した。大規模災害時は人的・資金的な支援も行うことがある。また、災害ボランティア支援プロジェクト会議と連携した災害ボランティアセンターの後方支援、ボランティアバス運行支援などを実施した。

Q3. これまでの災害支援で印象に残っている出来事があれば教えてください。

以前からの知り合いが最前線でがんばっているときに、陣中見舞いで伺うと、パッと表情が明るくなる、という場面をよく見てた。また、逆に当センターが災害支援を始めた時に、全国の仕事仲間が募金を寄せてくれたことがあり、大きな勇気をもらった。専門性もちろん大切だが、それ以上に知り合いとして、友人として、顔を見せる、気持ちを寄せる、ということがどれほど心強いかを感じた。

Q2. これまでの災害支援を通して大切に思われていることは何ですか？

災害支援は一分野ではなく、平時に対置する災害時という状態の違いでしかないということ。あらゆる分野に災害時があり、それぞれの災害フェーズにおいて多様なNPOに出番があると考えています。その考えのもと、地元のNPOが活躍できる出番をどう作り、コーディネートできるかを考えている。

Q4. 東日本大震災から今日までの災害支援活動で大きく変わったことは何だと思えますか？

良くも悪くもNPOやボランティアへの注目と期待が高まっていると思う。また、災害時に活動した経験のある団体も増え、多様な活動が展開されるようになった。外からの期待が大きいと、振り回されたり大変になることもあるかもしれない。しかし災害支援は平時活動の延長にあるものなので、自分たちは何をすべきか、何ができるのか、一番大事にしたい人たちの声を聴き、まずは自分たちで考えてみるのが大事なのだろうと思う。そこが明確になれば、支援してくれる人も出てくるのだろうと感じる。

回答者

一般社団法人ふくしま連携復興センター
代表理事 天野 和彦 氏



Q1. 福島県で災害が起こった際に行っていることを教えてください。

ふくしま連携復興センターでは、2011年3月発災の東日本大震災・福島第一原子力発電所事故における被災者・被災地支援を重点として活動を継続してきたが、昨年度、それに加えて、今後予想される自然災害や大規模災害への災害支援、復興活動に対応するため、多様な主体との協働による体制構築を目的とし「防災・減災の為の活動」を新たに定款に盛り込んだ。その一因となった2019年台風19号の際には、弊センターが声がけし「台風対策会議」を設置。内閣府、行政、社協、企業、大学、NGO、NPO（中間支援団体も含む）ふくしま百年基金、日赤等の関連団体が緊急招集に応じ、情報共有と課題の対応について議論を進め対応にあたった。また、特に被害が大きかったいわき市に設置された「いわき市被災者支援情報共有会議」にも参加し、情報収集と課題調査を行った。この動きが現在の地域コミュニティを活動した災害対応の体制構築の必要性をもたらしてくれた。

Q2. これまでの災害支援活動で印象に残っていることを教えてください。

東日本大震災における被災者支援の活動においては、11年経った今も弊センターはその支援活動の歩みを止める事はできない。甚大な被害となった原子力被災12市町村等における被災者が、いまだ長期的、広域的な避難生活を継続せざる得ない状況や、帰還困難区域解除となった地域においても様々な課題が混沌し複雑化しているからである。その活動のひとつひとつが個々の被災地域のフェーズに幾つも重なり存在している。また、緊急期においてこれほどの大規模災害への対応に追われながら、避難所や避難先での住民コミュニティを維持し被災者に寄り添い避難環境の整備や生活環境を充実させるため、県内外の行政、社協、NGO、NPOの力を借りながら連携しサポートした事は忘れられない。

Q3. 今、福島の災害支援に必要なだと感じていることを教えてください

災害が起こるたびに、これまでの災害の教訓は活かされたのかということが声高に言われる。そうではなくてむしろ、災害の教訓が活かされるような社会システムはどのようにあればよいかについて考えていく必要がある。私たち市民活動団体も災害が起こる度に、その都度ネットワークを組み情報共有を行ってきた。しかし毎年のように起こる災害に対して、迅速に対応するためにはまなかあいづをカバーする県域でのネットワークを常時稼働させていくことが重要ではないか。そのための準備をいま始めているところである。



Q4. それぞれが個人でできる備えは何だと思いますか？

- ・ハザードマップ（避難場所や危険区域の確認）やWEB上での道路情報、災対情報、災害掲示板などのコンテンツを日頃から収集し緊急時に活用できるように準備をしておく。
- ・水や、乾パンなどの非常食を常備しておく。
- ・携帯やラジオなど通信機器に必要なバッテリー等の確保。
- ・家族間での防災に関する日頃からの話しあいや家の中の安全な場所の確認など。
- ・地域の繋がりを平時から持つなど。



回答者

南相馬市市民活動サポートセンター 事務局長 原田 淳子 氏



Q1. これまでの南相馬市の災害の歴史（背景）
を教えてください。

私たちが住まう南相馬市は海とともに生きていることから、地震・豪雨に加え津波被害が災害の歴史としてあります。近年では2011年に発生した東日本大震災に加え人災とも言われている福島第一原子力発電所事故、2021年、2022年と相次いで発生した最大震度6強の地震が人々の生活を襲いました。



Q2. 今年の3月16日に発生した福島県沖地震
による災害状況を教えてください。

2022年3月16日23:36に発生した震度6強の地震は体感したことのない揺れだった。東日本大震災の時の揺れより激しく感じ津波警報が鳴り響き暗闇のなか、高齢単独世帯に声を掛け避難を促しました。電気、水道、電波すべて使用することができない状況が数日続いた。夜が明けると地域が大変な被害に見舞われたことを知った。住宅被害のあった4,617件のうちほとんどが屋根被害の一部損壊判定が特徴。



Q3. 3月16日に発生した福島県沖地震による被災者への支援においてうまくいったこと、難しいと思ったことや反省点を教えてください（今後支援される皆さんへのアドバイスなど）。

被害状況が南相馬市の中でも鹿島区に集中（46.4% ※3,705世帯のうち1,722世帯が被災）。自衛隊による給水や災害ボランティアセンター等が立ち上がったが、地域の36%が高齢者世帯であるため自力で援助を求めることが難しい人は孤立を極めた。南相馬市市民活動サポートセンターとして平時より地域社協との連携や住民への社会参加の機会を推進するための活動から地域に馴染んできたことで、災害支援に移行しても違和感のない活動を行うことができた。また災害ボランティアセンターでは市内のボランティアに限るなど幾つかの制約があったため、県外NPOで技術系の団体との窓口や連携は混乱を極めたことから、県外のNPO災害支援チームとの連携窓口を、南相馬市市民活動サポートセンター運営団体である一般社団法人南相馬パブリックトラストで事務局を行うこととし、新たに「みなみそうま住民とNPOによる災害支援チーム このゆびとまれ」を結成した。役割を分担することで、災害ボランティアセンターでは地域の力を集結し、このゆびとまれでは県外からの専門性のあるNPO技術系アライアンスチームとの連携、入浴支援、生活再建相談を行った。反省点は、災害は急に起こるものでデータの管理などのフローを構築することができないまま活動に追われてしまったため、自組織での支援件数など正確な数字管理ができなかった。

Q4. 今後の災害支援にどのようなものがあれば良いと思いますか？

みなみそうま市民とNPOによる災害支援チーム
このゆびとまれは、災害体験を通じ地域住民と災害について学び、人とひとが支え合うための心を育み暮らしやすい地域をみんなで一緒に考える場になるため寄与している。今後何処かで起きる災害に、私たちの経験が少しでもお役に立てたら良いなと感じている。災害支援に大切なことは相手の立場になって考えることができること、そしてNPOが持つネットワークが重要であると思う。



回答者

認定特定非営利活動法人ふくしまNPOネットワークセンター スタッフ

Q1. 3.16南相馬市災害支援でどんな支援活動を行いましたか？

福島県の中でも被害の大きかった南相馬市で中間支援センターを運営している南相馬市市民活動サポートセンターへ、ふくしまNPOネットワークセンタースタッフとして計5日程サポートへ行った。災害が起こった地域のNPO支援センターは、災害支援業務と通常業務を既存のスタッフで行わなければならない、人手不足が予想されたため、災害に詳しくなくても、支援センターの業務を理解していれば手伝いが可能だと考え、応援スタッフとして南相馬市に入った。来客対応や電話対応等のセンター業務だけではなく、「みなみそうま住民とNPOによる災害支援チームこのゆびとまれ」の活動にも参加させていただいた。

Q3. 3.16災害支援活動を行って、今後どんな支援があれば良いと思いますか？
(自分がいる地域が災害にみまわれた際も想定して考えてください。)

NPO活動においても、日頃から地域に馴染んだ活動を行っていくことが防災につながっていくのだと感じた。防災関連にとどまらず、地域住民を巻き込んだ様々な講座やイベントを開催しお互いの距離感を縮めることで、有事の際に円滑な支援の授受ができるようになるのではないだろうか。

Q2. 支援活動の際にどんな感想（印象）を持ちましたか？

他事業所へのサポートというのが初めての経験だったため最初は不安があったが、南相馬市市民活動サポートセンタースタッフの方が必ず1人はずいてくださっていたので本当の不足分を補うような形で臨めた。また、「みなみそうま住民とNPOによる災害支援チームこのゆびとまれ」の活動に参加させて頂いたときは、自分の地域にはこんな風に親身になって手助けをしてくれる人達がいるだろうか？と考えさせられた。

以上、今回ご協力いただいたアンケート調査を総括致しました。このアンケートの結果を今後のサポセンの事業に活かしてまいりたいと存じます。ご協力いただいた皆様には改めて御礼申し上げます。

2022年 9月 1日 ふくしま地域活動団体サポートセンター